

神戸女学院大学女性学インスティテュート主催

2017年度「女性学研究会」実施記録

協力：奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究中心ター

第1回 女性学研究会

2017年6月23日(金) 15時40分～17時50分、於：文学館L-7

◇小坂美保（神戸女学院大学体育研究室専任講師）

「スポーツにおける『性別問題』—『女性』アスリートに向けられるまなざし—」

スポーツ（競技）において素晴らしい記録が出された時……当該アスリートに向けられるまなざしは、多くの場合「賞賛のまなざし」あるいは「疑念のまなざし～ドーピングでは？」だろう。しかし、女性アスリートの場合、もう一つのまなざしに加わる。「男性なのでは？～性別への疑義」という身体に向けられるまなざしである。本報告では、ある女性アスリートを事例にスポーツにおけるジェンダー問題について検討していく。（本誌53～72頁掲載の論文参照）

◇浅田晴久（奈良女子大学研究院人文科学系准教授）

「バングラデシュ農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のためのNGOとの共同研究—アンケート調査の分析からみる農村女性の実態—」

バングラデシュは、ミレニアム開発目標（MDG）の母子保健項目の達成状況において良好な成績を修めつつある国とされているが、目標の達成は医療要因の改善のみによって成し遂げられるものではなく、ジェンダーや教育、経済などのより広い要因から分析される必要がある。本研究では地元NGOの活動が農村女性の生活に与える影響をさまざまな視点から評価することで、国全体を医療化する道筋とは異なる方法で母子保健指標を改善する可能性を探ることを目的とする。（本誌198～216頁掲載の講演録参照）

第2回 女性学研究会

2017年9月29日(金) 15時40分～17時50分、於：文学館 L-7

◇栗山圭子（神戸女学院大学文学部総合文化学科専任講師）

「日本中世における『母』—安徳天皇を事例に—」

キャラ弁に手作りのお菓子、PTAの役員やお当番、加えて、おしゃれなワーママたるべく、自身の身だしなみも「魅せる」ことすら意識するなど、現代日本の母は、日々多くのタスクをこなし、その質に対しても高いレベルを求められているのが現状である。一方、日本中世社会では、実母／准母（養母）／乳母のような多様な「母」が存在し、母役割は必ずしも一人の人間に集約されないという現実があった。現代の「積みすぎた」母とは異なる実態について考察するとともに、多様な「母」の存在を生んだ中世社会について検討してみたい。（本誌1～23頁掲載の論文参照）

◇磯部香（奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター特任助教）

「現代中国における早期教育の隆盛と家族・ジェンダー構造の変容」

現在、東アジア一体は少子高齢（化）社会に突入し、既存の家族・ジェンダー観を再考する時期に来ている。2015年までの約36年間に渡り「一人っ子政策」によって子育ての価値が高まっている中国では、改革開放による市場化の流れの中で、経済的に豊かな階層・世代が、子育てを一回きりの失敗できないライフ・イベントだと認識し始め、早期教育を行うことを受容し始めている。この早期教育の浸透によって、子育ては父母そして祖父母が一丸となって行うものという既存の子育て観から、両親、特に母親による「科学的知」に基づく新たな子育て・教育観へとシフトしている。本報告では、早期教育が中国の人々にどのように受け入れられているかを明らかにすることで、それが現代中国の家族やジェンダー構造にどのような変容をもたらそうとしているのかを一考してみたい。